

## 入選

### 親切の神様

山口県 末武中学校

2年 米村柑奈

私には、100万回「ありがとう」と伝えても足りないくらいの先生ができました。

私はこの夏休みに、憧れの全国大会を目標に、全力で英語弁論にチャレンジしました。私の担任は、70歳近くの先生で、「英語弁論の神様」と呼ばれています。私は、その神様が私に何か不思議な力を与えてくれて、優勝に導いてもらえるかもしれないと、都合の良い期待を抱いていました。

しかし、そんな都合のいい魔法のような話はありませんでした。普段は仏様のように温厚で優しい先生が、練習のときには別人のようで、練習は過酷なものでした。弁論原稿は、いままで生きてきた中で1番やり直しました。もう、作文用紙を見ることが嫌になるくらい。毎日毎日、休みなく行われる早朝からの発声練習。ダメ出しの嵐。「いや違う」という1文字を何10回も練習。私の中で、先生は「弁論の神様」ではなくて、「弁論の悪魔」と化していました。

心が折れそうになっていたある日、職員室で教頭先生に呼び止められて、「今日はお休みなのに、本当に毎日よく頑張っているね」と声をかけられました。そのとき、私はハッとしました。「今日は日曜日……。先生にとっても、お休みだ。」と。

毎日毎日、休みもほとんどなく練習をしていたので、曜日の感覚がなくなっていました。休みの日を私のために過ごしてくれている。当たり前なことじゃないぞ、と。それなのに私はグチグチと……。自分の言動を振り返ると情けなくなりました。何度も作文を推敲してくれたこと、何度も英文に直してくれたこと、何度も英語を録音してくれたこと、毎日の練習……。何1つとして当たり前のことはありませんでした。

そんな当たり前じゃないことを、当たり前のようにこなしてくれた先生、先生の熱い思い。これこそ無償の親切だと、感謝の気持ちでいっぱいになりました。私が全国を本気で目指しているから、先生もそれに本気で向き合ってくれているのだ、と胸が熱くなりました。親切って目に見えないから気づくのに時間がかかってしまいました。すべては「私のため」でした。

この世の中には、当たり前なことなんて何1つとしてありません。私は「弁論の神様」から英語のスキルだけでなく、「誰かのために」いっしょに本気で熱くなったり、「誰かのために」いっしょに本気で熱くなったり、「誰かのために」当たり前じゃないことを当たり前のようにこなしたりする親切を学びました。先生は「弁論の神様」であると同時に、「親切の神様」でもありました。

私はこの日を機に、自分の考えを改めました。これからは、「誰かのために」何かをしていきたい。嫌な顔1つせず、恩に着せることもせず、当たりまえのように、自然にサッと。先生が私にしてくれたように。ゴミを拾ったり、トイレのスリッパをそろえたり、花瓶の水を取り替えたり、小さなことから親切につながると思うから。